

彼の飲み振りを半賞稱へ、半は恐れるやうな表情をした。そして、母親が丁度子供にする時のやうに、彼女の口元が自然に歪んでゐた。

「ほんとお美味さうに飲むわね。些いと私も嘗めて見ようかしら。辛いお酒でせう。」

「さうでもありませんよ。少し飲つてごらんさい。」

「さうを、ちや貴方注いで呉れて？」と、お須磨は猪口を眞白いばつちりした其の指につまんで辰衛の前へ出した。

辰衛は奈何でも可いと云ふやうな調子で溢れるばかりに注いでやつた。

「まあ、こんなにな。。」お須磨は目を圓くしながら、恐る怖る唇をつけて一口飲んだ。彼女の目尻には直ぐ皺が寄つた。眉根も八の字を作つた。

「割合にさつぱりしたものね。でも強い酒ね。酔ふでせう、これあ。」

「一杯や二杯、何でもありやしない。」と、辰衛は獨言のやうに言つて、自ら自分の緒口に注いでまた少しづつ、飲み續けた。

「そんなに貴方召上つても可いこと？ 今の話で氣を腐らして自暴酒を飲んちや厭よ、あなた。」

「まさか。」辰衛は苦笑した。

「ねえ、眞面目に考へて下さいよ、絢子さんの問題を。貴方の一生の大事ちやありませんか。」

「だから、奈何しろと言ふんです？」

「離縁なさるか、しないか……。」

「絢子より僕自身が先決問題でさ、親父が僕を勘當するなら勘當されても可いです。」辰衛は目を吊上げながら言つた。

「それちや貴方満らないぢやないの。貴方を勘當させるくらゐなら、私こんなに苦勞しやしないわ。」

「ちや絢子は一體奈何なるんです？」

「貴方も思切りの悪い方ね。絢子さんには白井つて方があつて、散々ふざけた眞似を

してゐるぢやありませんか。まあ考へてもごらんなさい。白井さんが連帯の判を押したと云へば、大層義侠的で立派なやうだけれど、それも先を見越しての仕事に違ひないんですわ。なあに、今にあの文平の爺が目を瞑れば、辰衛なんざ奈何でもなるから損はしないと云ふ肚でね。絢子さんだつてやつぱりさうなのよ。だから、今度のことなんか。あの人たちが肚を合せてしたことに違ひないんですよ。だからね、絢子さんが憎いつて云ふんです。貴方は餘程しつかりしなくちや駄目よ。』

『うむ。』と、辰衛は頭の毛を搔撈るやうにして、食卓の上に突俯した。そして、唸るやうに、『さうかな。僕はそんな絢子とは思はんがな。』

『それだね、貴方があの方に迷つてゐるからなのよ。だから絢子さんのお肚の中が解らないんですよ。私ね、来た時からあの人は何だか恐ろしい程、肚の毅然した女だと思ひました。有繋政治家のお嬢さまだけに、普通の女は逆も敵ひませんわ。』

『え、然うですとも！』と、お須磨は大きく合點をして、『だから貴方がお氣毒でなら

ないんですよ。』

『うむ。』辰衛はまた深い溜息を吐いた。

## 七十

辰衛はお須磨が止めるのも聞かず、殆んど無意識に注いでは飲みくして、もう六七杯のウキスキイを呻つて了つた。眉尻の心持ち下つた、些つと愛嬌のある其の顔が、丁度湯でた蟹のやうに赭くなつてゐた。そして、暫らく然うして俛いてゐた揚句に、彼は踵跟と起ち上つた。

『僕は、これで失敬します。』

と、足がふらついて、そこにあつた椅子に仆れかゝつたが、漸と踏みこたへた。

『まあ危ない。だから、そんなに飲んでは不可ないと言ふのにねえ。』お須磨は周章て椅子を離れて、彼を助けようとしたが、彼女も一杯と少しばかり飲んだウキスキイの酔が廻つて、頭がふらくしてゐた。そして、あべこべに辰衛の背後に掴まる

やうにして、漸と身體を支へたのだつた。

『どこへ行くの？ え、貴方？』

『どこへ行くか、そんなことが解るもんか。足の向き次第だ。』辰衛はせゝら笑ひをしながら、お須磨を拂ひ退けるやうに肩を揺つた。

お須磨は其の手に緊乎と掴まつた。

『そんなことは不可ません。さあ私と一緒に歸りませう。さあ、ね、一緒に。』

『いゝや歸らない。俺にはもう歸る家がない。今日から宿なしだ。』

『笑談でせう。島家といふ立派な家があるぢやありませんか。』

『島家？ ふむ、俺はそれほど甘い人間ぢやないんだ。』

『誰が甘いなんて言つたの。だけど、自分の家へ歸るのが、どうして甘い。貴方は案外氣が小さいのね。可いから、私に委しておゝきなさい。決して悪いやうには爲ないから。』

『ぢや、絢子は奈何するんです？』

『また奥さんのこと？ まあ、貴方のお口には絢子が吸付いてゐて離れないんですね。あんな薄情な人なんか、奈何でも可いちやありませんか。もつとく〜好い奥さまが、世間には幾許もあるわよ。外聞が悪からね、そんなことはもう言ひつこなしにませうよ。ねえ、可ござんすか。』と、お須磨は辰衛の背後を撫劬はるやうにして言つた。

『それぢや、絢子はやつぱり離縁ですか。』辰衛は、かう恨みつぽい目をして、お須磨の顔を見詰めた。そして、ごつかとまた椅子に腰を落した。充血した其の目が、鱗の目いやうに据つてゐた。

『ぢやあね、かうませう。』と、お須磨も椅子を傍へ寄せて、『まだいろ〜お話がありますからね、此處ぢや不可ないから、右に左一度此店を出ませう。ね、それが可いでせう。然うませう。さあ、いらつしやい。』

『まだ話し？』辰衛は酔つてゐても、神経がびりりと動いたらしく、急に目の色を變へて熟とお須磨を見詰めた。

『それも厭？ なら、爲方がないわ。』 お須磨はわざとらしく、嫣然と笑つて、『左に右、此處を出ませう、ね。然うしませう。』

辰衛はそれには應へないで、いつの間にかまた猪口を手にしてゐた。お須磨はそれを褫奪するやうにして、『此上飲んぢや大變よ。お酒に弱い癖に、奈何したと言ふんせう。』

『左に右、今日は失敬する。』 辰衛はまたよろ／＼と起上ると、梯子段の所まで来て、帽子を阿彌陀に冠つた。

『私も一緒に行くわ、どこへでも貴方の好きなところへ……。』

お須磨は素早く先に二階を下りて、女給に自動車をかけさせた。そして、危なさうに下りて来る辰衛を、女給と力を協せて、宥め賺しながら階下の椅子へ連れて来た。附近の食卓にゐた三四人のお客が、一齊に此方を見向いてゐるのを平氣な風にして、辰衛はくだを巻いてゐたが、間もなくやつて来た自動車で到頭否應なしに乗せられて了つた。

『些いと、築地までやつて頂戴。』

お須磨は辰衛と並んでクシヨンに腰を下すと、低い聲で運轉手にさう言ひつけた。自動車は直ぐがたと動き出した。

## 七十一

辰衛が自動車から下されて、築地河岸の或る家へ扶け入れられた時には、彼はまだ酔が醒めないばかりか、ぐたりとして温順しくなつたところを見ると、反つて酣酔した人のやうにも思はれた。

自動車の中では、彼は奈何かするとお須磨の膝に凭れかゝるやうに體が崩れて、何と言ひかけても其の意味がよく通じないやうであつた。

『奈何して？ 苦しい？』 など、お須磨は始終彼を劬はるやうにして訊いた。

『どこへ行く、何處へ？』 俺は家へは歸らないよ。辰衛はぐにや／＼になつた體で、漸とお須磨から離れて、呂律の纏れたやうな調子で言つたが、それも癡痺したや

うな元氣のない聲であつた。

『まあ、随分酔つてるわね。それとも奈何かしたのぢやないかしら。』と、お須磨は不安さうに呟いた。筋張つた手などに觸れると脈がごき／＼打つてゐた。眼瞼も重さうであつた。それでも自動車から下りる時には、幾らか身體がしやつきりとなつたらしく、よろ／＼しながらも、意氣な門の中の石だゝみを歩いて、女中に迎へられながら玄關口へ上つて行つた。しかし、辰衛はそれが何處であるかを知らなかつた。

『此家は何處だ？』廊下を幾曲りして、案内された八疊のもの靜かな部屋の入口に突立つたまゝ、彼は然う言つて眠さうな目を睜つた。

『歸らう／＼。誰がこんな所へ、俺を連れて來たんだ。』

『まあ切望、さう仰言らずに、少しお休みなすつて。』女中たちは彼を座蒲團の上に据えて、脇息を當がつた。

辰衛は女たちの顔をぢろりと見て、『お須磨は奈何した？ お須磨は……。』

『あの方でございますか。今女將さんとお話をなすつてゐらつしやいます。』女中は

然う言ひながら、お茶を注いで出した。

『濃いお茶でも召食つて。酔が覺めますから……。』

するうち、そこへお須磨が女中と入違ひに入つて來て、彼を介抱してゐたが、辰衛はへと／＼になつて、そこへ横はるかと思ふと、矢張り氣にかゝるらしく、『こゝは何處だ、何處だ。』と言つて、荐りにそれを訊いてゐた。そのうち、彼はいつの間にか、ぐつすりそこへ眠つて了つた。

目を覺ましたのは、もう大分遅かつた。部屋にはもう日暮れ方らしい寂しさが僅に漂ふて、軒端の簾に夏の夕日が蒸暑く残つてゐた。と見ると、彼は見たこともない部屋の真中に、水色の麻の蒲團を着て寝てゐたことに氣が付いた。著物もいつか脱がされて、格子縞の白地の潤袖を着せられてゐた。そして、それがごんな種類の家だかといふことを考へると、彼は言ふに云はれない厭な氣持がした。

酒はもう醒めてゐたが、まだ船にでも暈つてゐるやうな氣持で、頭が懈かつた。手足の筋肉も弛んだやうになつて、魔藥が醒めかけて來た時のやうな淡いもの悲しさが、

彼の心を閉してゐた。そして、知覺が段々覺めて來ると同時に、お須磨に助けられて自動車に乗つたことや此處へ下されたことや、カフェで思ひがけなく自分の素性を聞かされたことや、お須磨に附絡はれて、そちこちしたことなどがそれからそれへと、止途なく思出されて來た。そして、今日一日のさうしたことが、まるで夢のやうでもあり、現のやうでもあつた。さうして、今まで經驗したことも、想像したこともないやうな、失望の惱みに陥ちてゐる孤獨の寂しさを深く／＼彼は感じたのであつた。すると、お須磨が自分の周りにゐないのに、新しく氣づいた。確かに自分の側におた筈だが、と考へると、辰衛の顔には實に取返しつかない、とんでもないことをした後のやうな悔恨の念が、むら／＼と現はれた。

「あゝあ、俺は何てことをしたんだ！」

辰衛は吐出すやうに言つて自ら嘲つた。咽喉が乾いてゐて、水を求めるのも忘れたやうに、ぼんやりと天井を仰いだ。

「そんなに、絢子さんのことばかり思はなくたつて可いでせう。些とは私のことと思

つて頂戴よ。もう、大概私の心も判つたでせうに！」然う言つたお須磨の情熱的な言葉を彼は思出した。そして、深い淵へ引込む悪魔のやうな魅力で、自分の心をぐい／＼と動かして行つたことを思出した。知覺の朦朧とした自分の身體に付け入るやうに、まるで身體の自由を失した人を撈るやうに、肉感的な其の身體を犇と寄せて來たことを、彼は思出した。

其時は何も彼もぼんやりとしてゐたが、今考へ付いてみると、それは皆なお須磨の豫定の行動のやうに思へて來た。自分をかうした陥穽へ突落すまでの手段を、いろいろに執つてゐたやうに考へられて來た。さう思ふと今日まで、自分が外國から歸つて來て以來の、お須磨の自分に對するある謎が、今日愈よ解けたやうな氣がした。今までいろいろな意味をもたせて自分に對してゐたお須磨の爲事は、今日の一事を爲遂げるために踏んで來た段取の路のやうに思へて來た。今日の事を成就させるために、今までいろいろな犠牲を拂つて努力したやうに思はれて來た。

さう氣を廻してみると、辰衛は愈よ不快至極な悔恨の情に驅られずにはゐられな

つた。

「何たることだ！」また、彼は自嘲的に罵つた。

「悪魔！ 悪魔！ 淫婦！」續けざまに、それは丁度、相手が目の前にでもゐるやうな様子で彼は怒號した。

と、此時廊下に柔かな衣ずれの音がして、人の近づく氣勢がした。

「貴方、眼が覺めて？」障子が開かると同時に女の聲が、すうツと入つて來た。聲の主は勿論お須磨である。

辰衛はがばと刎起きて、「悪魔奴！ また來たか！」と、叫ぼうとしたが、それはしかし口へは出なかつた。焦るばかりで、彼は何も女に言ふことは出来なかつた。

「奈何したの？ その顔は？」お須磨はつか／＼と入つて來て、枕頭にべつたりと坐つた。「まあ恐い顔をするごと！ 悪い夢でも見て？」

「さうだ、悪い夢を見たんだ。いや、見せられたんだ。誰がそれを見せた？」辰衛の聲は尖つた。

「まあ、奈何したの？」意外と言はぬばかりの顔をして、お須磨は眼を睜つた。

「なんて、白々しい女だらう？ なんて圖々しい女だらう？ あんなにまでしてゐて、まるで、何事もなかつた昔のやうな顔をしてゐる。憎々しい奴だ。」辰衛は心にさう思つて、さも忌々しさに女の顔を凝視めた。

「まあ、きついお顔ね。さ、そんな恐い様子をしないで、おひやを召上つたら奈何？」強ひて嬌然しながら、お須磨は枕頭のコップに水を注いで出した。

「これでも、しかし、表向きは俺の姑に當る人だ！」さう思ふと、女中か何かを怒るやうな譯にもいかないので、辰衛もいくらか氣を柔げて、「いや有難う。だが、もう酔も覺めたしするから、先へ歸つて下さい。僕は少し／＼してから、歸ります。」考へ深さうに首垂れたまゝ、コップを受取らうともしなかつた。

「もうお嫌ひなさるの？」お須磨は張合抜けがしたやうに、そつとコップを持つた手を下げて、「一緒に來たんですから、一緒に歸りませう。ね、それが可いでせう。まあ、おひやをお飲みなさいな。」

「可いですが。抛なぎいて下ください。」突出つきたされたコップを見向みむきもしないで、辰衛たつゑは忌々いまくしさうに、「あなたが先まきへ歸かへらないなら、僕ぼくがお先さきに失敬しつげいします。」と、辰衛たつゑは不意ふいに立上たちあつた。そして、備そなへ付けのベルを押おした。それに引入ひきいれられたやうに、お須磨すまもふら／＼と起たつて、辰衛たつゑの潤袖ひもそでに手てをかけた。

▽ 續篇近刊豫告 ▽

「あけほの」はこれに續ついて發行はつする續篇つづきを以て愈々完結する。可憐な殉子の運命うんめいはどうなるであらう？ 辰衛たつゑと別わかれるやうなことになるはしないか別わかれるとすれば其後そのあとはどうなるであらう？ 他人たにんの良人りやうじんと知りつゝ横戀よここひ慕ほをしてゐるお須磨すまはどうなつて行くであらう？ 辰衛たつゑとお須磨すまとの仲なつは？ 更さらにお須磨すまと小山こやまとの關係かへいは？ そして、かの白井しらいはどんな役廻やくまわりを演あづかるか？ それらのものは悉ことごとく此の續篇つづきで解決かいげつされてゐるのである。しかも、大詰おほひらきの大慘劇だいさんげき大悲劇だいひげきに至いたるまで、其の面白おもしろさは息もつけないほどである。本篇ほんぱんの讀者しやうしやは、どうしても此の續篇つづきを手てにしなれば安心あんしんが出来できないであらう。況いはんや本篇ほんぱんに充みち満みちたより一層いっしやうの面白おもしろ味あじと、盡つきせぬ生命せいめいを求もとむるものは、必ず近刊きんぱんの續篇つづきを待まちたなければならぬ。



大正十年六月十八日印刷  
大正十年六月廿五日發行

(あけぼの)

【定價金貳圓】

不許複製

6年



著者

德田秋聲

發行者

東京市小石川區表町百九番地  
古藤田喜助

印刷者

東京市麴町區有樂町二丁目一番地  
吉原良三

印刷所

東京市麴町區有樂町二丁目一番地  
報文社

發行所

振替東京  
〇八六四

文

洋

社

東京市小石川區表町百九番地

電話小石川一〇四〇番

501  
81

終